



TITLE:

人間喜劇における「錬金術師たち」

AUTHOR(S):

村田, 京子

CITATION:

村田, 京子. 人間喜劇における「錬金術師たち」. 仏文研究 1988, 19: 43-59

ISSUE DATE:

1988-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137741>

RIGHT:

『人間喜劇における「錬金術師たち」』

村 田 京 子

序

錬金術は一般に、疑似科学として蔑まれ、錬金術師は愚者または詐欺師とみなされてきた。このような評価に対して、バルザックは様々な作品の中で異議を唱え、錬金術師を擁護している。それだけではない。彼は、作中に錬金術師そのものを登場させ、彼らの実験のもつ真の意味を明らかにしている。実際に、バルザックが錬金術師をどのように捕らえていたか、彼の作品を通して見ていきたいと思う。

バルザックにおける錬金術師像を検討する前にまず、西洋錬金術の歴史、及び理論に簡単に触れておきたい。

第一章 西洋錬金術

西洋の錬金術の発祥の地はエジプトのアレキサンドリアで、後一世紀頃出現したとみなされている。その理論づけは、アリストテレスの哲学まで遡る。アリストテレスは、物質の中で変化するものを「形相」と呼び、変化せずに常に同一性を保っている本質を「質料」と名付けた。この「質料」と「形相」の考えを押し進めていけば¹⁾、最終的には「さまざまな無限の形相をとることができるただ一つの究極的な質料²⁾」に達する。理論的にはどんな物質も他のあらゆる物質に変化させることが可能であり、従って、例えば卑金属の形相を取り払って質料に還元すれば、この質料に金の形相を導入することで金への変容を成し遂げることができる。このような哲学に基礎を置き、古代的な魔術思想が加味されて初期の錬金術の理論が作られた。

歴史的にみれば、錬金術はエジプトからギリシア語世界へ広がり、イスラム勃興後、アラブ語世界に伝わった。12世紀になってアラブ語の文献がラテン語に翻訳されて、西洋に伝わり、13、14世紀には西ヨーロッパ全体で錬金術が盛んになった。時代が深まるにつれ、錬金術は神智学的傾向が強くなり、魔術の理論が隆盛をなした15世紀では、一種の秘教となった。更に16世紀にパラケルススが登場し、彼の大宇宙（世界）と小宇宙（人間）との照応の思想、及び医学への錬金

術の実用的応用は、一方は17世紀の薔薇十字団運動へと、他方は現代の化学へ向かう出発点となった。そして17世紀末、デカルトに代表される近代合理主義の出現によって、アリストテレス的物質観が否定され、錬金術は衰退の一途を辿る。ただ錬金術のテキストは18世紀に入っても数多く現れ、19世紀の始めにいたって古代から続いた伝統がとだえた。

このような錬金術の流れを追ってみると、大きく二つに分けることができる。すなわち、実際の化学作業を伴う錬金術と、「霊的黄金」の獲得を目指す神秘的錬金術である。実際の錬金術は、実験室において「第一質料」（硫黄、水銀、鉛等）に熱を加え、黒化→白化→黄化→赤化という四つの位相を通過させて、黄金への変成を目指す。錬金術師の考えでは、金属は生きており、すべての鉱物に「金の種子」が内在している。金属は、太陽から生命を与えられ、植物のように大地の母胎内で「成長する」のであって、幾世紀にもわたる自然の作業を通して黄金に成熟する。錬金術師は、その成長のリズムを加速し、鉱物がすみやかに金になるよう自然を援助する者である。従って、錬金術とは既に存在しているものを増やす「増殖の学³⁾」であり、人間の技術が時間の仕事にとって代わったものと言える。この金属変成に不可欠なものが「賢者の石」で、この薬液は卑金属を金や銀、ダイヤモンドに変え、全ての生成物を溶解できる特性を備えている。また、「賢者の石」からは不老不死の霊薬が得られ、それを所有する者は、長寿のみならず殆ど永遠の生命を授けられる。実際の錬金術は、一言で言えば、この「賢者の石」の探究にあった。

それに対して神秘的錬金術は、物質的な黄金を求めるのではなく、魂の浄化を目指す。「卑金属とはこの世のさまざまな欲望と煩惱、正しい人間存在の発展を妨げるもの一切であった。賢者の石とは、神秘的変成によって姿を変えた人間であった。鉛から黄金への変化は、人間が『真』『善』『美』に向かって上昇すること、誰もが自分の内部に持っている祖型を実現させることであった。⁴⁾」従って、「第一質料」が経る四つの位相は、人間の受難→死→蘇生の象徴となり、賢者の石を見出すことは、森羅万象の真の存在理由の発見、第一原因（＝神）と交わる力を持つことである。

ところで、錬金術で注目すべきことは、神に対する観念である。錬金術の考えによれば、「『神』はあらゆる事物の『内』にも『外』にも存在する⁵⁾」。「神」は物質宇宙に植えられた霊の種子であり、無限の形態を通じて顕現する。それ故、どの石にも人間の種子があり、人間の中には宇宙を生み出す種子が内在している。術によってこの種子を成熟させることが可能であり、それは「人間の霊的本性においては再生と名付けられ、物質としての元素においては変容と呼ばれている⁶⁾」。人間の本性の中に全宇宙が縮小して反映されているように、宇宙のあらゆる要素が一粒の砂の中にも隠されている。すなわち、小石から神に到るまで同じ生命が宿っているのである。錬金術は、万物に潜在している種子を成熟させ、「神」の顕現を導く術であると言える。

このように、錬金術の独自性を構成するのは、一つは、エリアーデの言葉を借りれば、「物質の複合的で劇的な生命⁷⁾」という汎生命主義であり、もう一つは物質の原一性（Unité）の観念であ

る。錬金術師は鉱物に内在している金の種子の成熟のリズムを早め、物質の形態を変化させる者、と同時に、人間の意識を神の意識まで高める者でもあった。

第二章 『人間喜劇』における錬金術

それでは、バルザックの作品世界において錬金術師がどのような形で現れているか検討していきたいと思う。錬金術師の原型は、『人間喜劇』以前の初期小説に既に現れている。まず、1822年に、オーギュスト・ド・ヴィエレルグレ (Auguste de Viellergré) とローヌ卿 (lord R'Hoone) との共作の名のもとにバルザックが書いた『ジャン・ルイ、または拾われた娘』 (*Jean Louis ou la Fille trouvée*) という作品の中に、マイコ・モンテジュマン (Maïco-Montézumin) という毒物学者が登場する。続いて同年の、オラース・ド・サントーバン (Horace de Saint-Aubin) という変名で書いた『百歳の人または二人のベランゲルド』 (*Le Centenaire ou les deux Beringheld*) の「百歳の人」ことベランゲルド・スキュルダン 2 世 (Beringheld-Sculdans II)。23年の『最後の仙女、または新不思議なランプ』 (*La Dernière Fée ou la Nouvelle Lampe merveilleuse*) の冒頭に現れる化学者オステルヴァルド (Osterwald)。『人間喜劇』の作品群においては、1830年の『不老長寿の霊薬』 (*L'Elixir de longue vie*) のドン・ジュアン (Don Juan) とその父親バルトロメオ・ベルビデロ (Bartholoméo Belvidéro)。34年の『絶対の探究』 (*La Recherche de l'Absolu*) におけるバルタザール・クラス (Balthazar Claës) とアダン・ド・ヴィエジュホフニャ (Adam de Wierzychownia)。そして、『カトリーヌ・ド・メディシス』 (*Sur Catherine de Médicis*) の中の第二章で、36年に書かれた『リュグジェリ兄弟の秘密』 (*Le Secret des Ruggieri*) に登場するローラン・リュグジェリ (Laurent Ruggieri) の名が挙げられる。

上記の人物のうち、実際に実験を行うのは、マイコ・モンテジュマン、オステルヴァルド、バルタザール・クラス、ローラン・リュグジェリの4人である。まず、『ジャン・ルイ』におけるマイコ・モンテジュマンは、暗黒小説に属する人物で、人に恐怖を起こさせる雰囲気醸し出している⁸⁾。彼の実験室めいた地下室は次のように描かれている。

Enfin, ils arrivent à une pièce voûtée remplie de vases, de cornues, de réchauds, de fourreaux, de planches garnies de racines et de fioles. On voyait même un squelette et des têtes humaines rangées et étiquetées!⁹⁾

ここではバルザックは非常に簡単な描写ですませており、マイコについて作者が特に強調しているのは、彼の女性に対する異常な復讐熱で、彼の実験ではない。ただ、彼の調合した毒薬が物

語の展開に大きな役割を果たすという意味で、彼の存在がクローズアップされているのみである。それ故、彼については薬物の知識があり、自然に対して広大な仕事を企てていた¹⁰⁾という言葉があるのみで、どういう実験を行っていたのか詳らかでない。

次に、『最後の仙女』は妖精物語の色彩を帯び、幻想と現実世界の融合した小説であるが、その冒頭に化学者夫婦が登場する。バルザックはここでは、二人の生活を昔話風に、そして、明るいうーモラスなタッチで描いている。

Le mari aimait les creusets, la femme chérissait les cornues [...]. Le chimiste toujours occupé, ses lunettes sur le nez, regardait bouillir ses vases et soufflait quelquefois le feu avec un soufflet tout usé [...]¹¹⁾.

第二章において、作者はこの化学者オステルヴァルドの、ルソー的観点に立つ社会観、文明観に詳しく触れており¹²⁾、「思考する人間は堕落した動物である」というルソーの思想を基盤とした、後の『人間喜劇』の片鱗を覗かせている。オステルヴァルドは、息子のアベルを育てるにあたって、ルソー的な教育方針を実践し、自然と一体となって生きることの幸福を享受すると同時に、あくなき情熱をもって自然の秘密を探り出そうと実験に没頭する化学者として描かれている。悪魔的な雰囲気漂っていたマイコ・モンテジュマンとは違い、オステルヴァルドは作者の思想を擁し、バルタザール・クラスにより密接なつながりを持つ化学者として登場している。ただ、これら初期小説にみられる実験室においては、坩堝、蒸溜器、炉等の実験道具がお座なりに言及されているのみで、実験内容やその目的については殆ど触れられていない。バルザックは、マイコやオステルヴァルドの存在をあくまでも副次的なものに留め、錬金術をまだ皮相的にしか捕らえていないのである。それに対し、『絶対の探究』のバルタザール・クラスの実験室には、排気鐘 (machine pneumatique) やヴォルタ電池、游動軸 (axe mobile) 等の最新の化学装置が備わっている。そこで実験に熱中するクラスの姿が、恐ろしいまでの迫力で次のように描き出されている。

Marguerite monta au laboratoire. En entrant, elle vit son père au milieu d'une pièce immense, fortement éclairée, garnie de machines et verreries poudreuses; ça et là, des livres, des tables encombrées de produits étiquetés, numérotés. Partout le désordre qu'entraîne la préoccupation du savant y froissait les habitudes flamandes. Cet ensemble de matras, de cornues, de métaux, de cristallisations fantasquement colorées, l'échantillons accrochés aux murs, ou jetés sur des fourneaux, était dominé par la figure de Balthazar Claës qui, sans habit, les bras nus comme ceux d'un ouvrier, montrait sa

poitrine couverte de poils blanchis comme ses cheveux. Ses yeux horriblement fixes ne quittèrent pas une machine pneumatique. Le récipient de cette machine était coiffé d'une lentille formée par de doubles verres convexes dont l'intérieur était plein d'alcool et qui réunissait les rayons du soleil entrant alors par un des compartiments de la rose du grenier. Le récipient, dont le plateau était isolé, communiquait avec les fils d'une immense pile de Volta. Lemulquinier occupé à faire mouvoir le plateau de cette machine montée sur un axe mobile, afin de toujours maintenir la lentille dans une direction perpendiculaire aux rayons du soleil, se leva [...].

(t. X, pp. 779-780)

実験内容も、従来の錬金作業ではなく、19世紀当時の化学者が実際に従事していた、歴とした化学実験であった。Madelaine Fargeaud 氏によれば、作中でポーランド人の化学者（アダン・ド・ヴィエジュホフニャ）がクラスに語る三つの実験（アラビアゴム、砂糖、澱粉の比較分析。窒素の分解。田芥子の種子を硫黄華の中に播き、蒸溜水を注入する実験）はすべて、当時の代表的な化学者 Berzélius の *Traité de Chimie* からの借用である¹³⁾。更に、クラスは、自然を有機界、無機界に区別し、元素の数を53個とみなしたが、これらの仮説もベルゼリウスの考えを引き写している¹⁴⁾。この他にも、クラスが妻に説明する涙の分解は Fourcroy と Vauquelin という二人の化学者¹⁵⁾に、塩素と窒素の化合実験は Pierre-Louis Dulong¹⁶⁾に負っており、クラスの実験にはラヴォワジエに始まる現代化学の推進者たちの実験が余す所なく反映されている。「『絶対の探究』の主人公は現代化学の諸々の努力の代表である¹⁷⁾」と、まさにバルザック自身が述べている通り、この作品は19世紀前半の化学の実状を要約したものと言えよう。

ただ、バルザックがこれらの実験から引き出した結論は、上記の化学者たちとは全く異にするものであった。その相違点としてまず、錬金術に対する評価が挙げられる。ベルゼリウスは、錬金術を「金を作る」と称するまやかしの術として否認している¹⁸⁾が、バルザックの二人の化学者は、錬金術を「先験的な化学 (chimie transcendante)」と呼び、錬金術師たちを彼らの探究の先駆者とみなしている。次の、ヴィエジュホフニャの言葉がそれを如実に表している。

Stahl, Becher, Praceles, Agrippa, tous les grands chercheurs de causes occultes avaient pour mot d'ordre le Trismégiste, qui veut dire le grand Ternaire. Les ignorants, habitués à condamner l'alchimie, cette chimie transcendante, ne savent sans doute pas que nous nous occupons à justifier les recherches passionnées de ces grands hommes!

(t. X, p. 718) (下線 筆者)

この、バルザックとベルゼリウスの錬金術への評価の相違は、両者の拠って立つ根本原理の相違に源を発している。すなわち、ベルゼリウスは二元論的な立場に立っていた¹⁹⁾のに対し、バルザックは一元論に与しているのである。例えば、ヴィエジュホフニャは自分の行った実験の結果、「自然のあらゆる生産物は一つの同じ原理を有するに違いないと考えるに到った」(ibid., p. 715)と語り、「一元的な化学 (une chimie unitaire)」(ibid.)に言及している。

また、バルタザール・クラスは生命の燃焼説²⁰⁾を唱えたが、これも錬金術的思想の特徴をなす汎生命主義に基づいている。すなわち、彼によれば、生命は燃焼を伴い、炉の活動の強弱によって生命が長く続いたり短く終わったりする。鉱物においては燃焼が潜在的である為、その破壊は無限に引き延ばされる。植物は湿気と呼ぶ化合によって限り無く生命を保つことができる。しかし、感性、本能、知能という三つの器官が完成されていくにつれ、燃焼の活動性は増すため、知能の最も発達した人間において最強度の燃焼が行われる、というものであった。クラスのこの主張はバルザックにはおなじみの「意志論²¹⁾」に関連を持つものだが、そこに鉱物から植物、動物、人間に到るまで同じ生命が宿っているという汎生命主義が見られるわけである。

『絶対の探究』の二人の化学者は、あらゆる被創造物の本質は同じで、構成においては単一の原理に帰するとして、この始原の原理を「絶対 (Absolu)」と呼んだ。「絶対」が創造の鍵を握るものであり、それを探り当てることが自分の目的であると、ヴィエジュホフニャが熱弁をふるっている。

De cette irrécusable expérience, s'écria-t-il, j'ai déduit l'existence de l'*Absolu*! Une substance commune à toutes les créations, modifiée par une force unique, telle est la position nette et claire du problème offert par l'*Absolu* et qui m'a semblé *cherchable*.

(t, X, p. 717)

このように、『絶対の探究』に現れる実験や理論は、当時の化学者に負うところ大であるが、二元論に立脚する化学理論が、バルザックにおいていつのまにか、錬金術師が考えていたような一元的な体系にすり代わってしまったと言えよう。

次に『カトリヌ・ド・メディシス』におけるローラン・リュグジエリについて検討してみよう。彼が魔術の流行した16世紀の、しかも占星術に造詣深いカトリヌ・ド・メディシスの寵愛を受けていたという設定だけに、その実験室は、クラスのとは違い、神秘的な雰囲気を出している。シャルル9世が彼の実験室で垣間見たものは、次のようなものであった。

Il [Laurent Ruggieri] partageait son attention entre un vieux manuscrit dont le parchemin doit avoir plusieurs siècles, et deux fourneaux allumés où cuisaient des sub-

stances hérétiques. Le plancher du laboratoire ne se voyait ni en haut ni en bas, tant il s'y trouvait d'animaux suspendus, de squelettes, de plantes desséchées, de minéraux, d'ingrédients qui farcissaient les murs : ici, des livres, des instruments de distillation, des bahuts remplis d'ustensiles de magie, d'astrologie; là, des thèmes de nativité, des fioles, des figures envoûtées, et peut-être des poisons [...].

(t. XI, p. 419)

この「悪魔の倉庫」(*ibid.*)に君臨するリュグジエリの傍らには、死人のような美女が横たわっており、醜い老婆との取り合わせも加わって、彼の実験室は悪魔的な様相を呈している。従って、それはマイコ・モンテジュマンの地下室を髣髴させるが、マイコには実験を支える思想が与えられていなかったのに対し、リュグジエリには、疑い深い国王をも納得させる程の確固とした理論が施されている。彼の展開する理論はクラスの、化学的事実を根拠とする理論と全く変わらないものである²²⁾。リュグジエリもまた、あらゆる物質に共通な、始原の原理の存在を認め、それを捕えることに、自己の存在理由を見出している。王を前にして彼は言う。

Il existe un principe primitif! surprenons-le au point où il agit sur lui-même, où il est principe avant d'être créature, cause avant d'être effet, nous le verrons absolu, sans figure, susceptible de revêtir toutes les formes que nous lui voyons prendre. Quand nous serons face à face avec cette particule atomistique, et que nous en aurons saisi le mouvement à son point de départ, nous en connaissons la loi; dès lors, maîtres de lui imposer la forme qu'il nous plaira, parmi toutes celles que nous lui voyons, nous posséderons l'or pour avoir le monde, et nous nous ferons des siècles de vie pour en jouir. Voilà ce que mon peuple et moi nous cherchons.

(t. XI, p. 431) (下線 筆者)

「私は錬金術師であります。けれども俗人のような考えをしないで頂きたい。私は金を作ろうとしているわけではありません！金の合成は目的ではなく、我々の探究の副産物に過ぎません。さもないければ、我々の企図することは大作業 (Grand Œuvre) とは呼ばれないでしょう。」(*ibid.*, p. 428) という彼の言葉は、単に黄金作りに励む者を「ふいご吹き」と呼んで軽蔑し、彼らと一線を画した真の錬金術師の自負を伺わせるものである。コーム・リュグジエリという、実在した占星術師に対してバルザックはいかさま師めいた胡散臭さを伴わせているのに対し、作者の創造物である、兄ローランについては自然の秘密を情熱的に追求する知性の王者としての風格を与えている。彼はバルザックの哲学思想の代弁者であり、その観点に立てば、彼はルイ・ランベール (Louis

Lambert), セラフィタ (Séraphita) に連なる『人間喜劇』における特権的人物の範疇に属すると言えよう。

錬金術師が直接登場するものは以上のような作品群であるが、それ以外にも錬金術に言及している作品が幾つか見られる。古くは『百歳の人』で、この作品の原題は『学者』(Le Savant)であり、最終的には、『魔法使い』(Le Sorcier)と改題されたことからわかるように、主人公のベランゲルド・スキュルダン2世は、「学者」と「魔法使い」という2つのイメージを合わせ持つ錬金術師に近い存在、錬金術の奥義を究めた超人として登場する。その彼が、錬金術や薔薇十字団への大衆の嘲りに対し、これらの学問は「生命流体」を求める真摯なものであると断言している。

Monsieur, vous avez osé parler des rose-croix, ainsi que d'une science que l'on méprise en ce moment, et vous en avez parlé avec ce dédain des gens qui n'ont rien approfondi. Quant aux rose-croix... n'est-ce rien que de se hasarder dans une science qui a pour but de rendre la vie de l'homme plus longue, et presque éternelle? de rechercher ce qu'on nomme le *fluide vital*?...

Quelle gloire pour un homme de le découvrir, et au moyen de certaines précautions, d'acquérir une vie aussi durable que le monde²³⁾.

『人間喜劇』という体系が整った後の作品である『知られざる殉教者』(Les Martyrs ignorés) (1837年)においても、作中人物が、金作りは錬金術の出発点に過ぎず、究極的な「構成分子 (la molécule constitutive)」の発見、「普遍的な生 (la Vie universelle)」の秘密を探ることが錬金術師達の目的であったと語る件がある。

Bécher, Stahl, Paracelse, Agrippa, Cardan sont de ces hommes incompris, incompris aussi bien que les alchimistes, accusés tous de chercher à faire de l'or! Faire de l'or était leur point de départ; mais croyez-en le témoignage d'un vieux savant, ils cherchaient mieux, ils voulaient trouver la molécule constitutive; ils cherchaient le mouvement à son principe. Dans les infiniment petits, ils voulaient surprendre les secrets de la Vie universelle dont ils apercevaient le jeu.

(t. XII, p. 743)

以上のように、「物質の原一性」という錬金術的な思想を擁する探究者の系譜は、ベランゲルド・スキュルダン2世に始まり、バルタザール・クラース、アダン・ド・ヴィエジュホフニャ、ロー

ラン・リュグジエリと続く。その上、《Unité》の観念は、バルザック独自の哲学思想「意志論」の骨子を成すもので²⁴⁾、広義に解釈すれば、「意志論」の代弁者である『あら皮』(*La Peau de chagrin*)のラファエル・ド・ヴァランタン(Raphaël de Valentin)、ルイ・ランベール、セラフィタも、神秘的錬金術の流れに属する。更に、芸術における「絶対」を追求したガンバラ(Gambara)やフレンホーフェル(Frenhofer)等の芸術家の名もそこに、加えることが可能であろう。

第三章 神への意志

錬金術師の役目は、自然と協働して、鉱物に潜在する「金の種子」の成熟のリズムを早めることであったが、それは最終的には時間そのものにとって代わることを意味する。時間の作業を引き受けることは、神の営為に携わることであり、自らが神になることである。神に対する、ある意味で不遜なこの考えは、『百歳の人』に遡って見出せる。ペランゲルドは、自己を時間や死に打ち勝った「永遠の存在」と規定し、マリアニンヌという女性を誘惑して言う。

Tout m'obéit dans la nature [...] : j'en suis le maître, je ne dépens ni de la mort, ni du temps, je les ai vaincus!... [...] tu accepterais de l'or de la main d'un prince pourquoi donc refuserais-tu *L'Eternel!*...²⁵⁾

実際、彼は自ら運命に成り代わって他人の生死に関わり、あらゆる場所に遍在し、何世紀もの間生き続けたのであった。

1830年に書かれた『不老長寿の霊薬』は、ドン・ジュアン伝説をバルザックなりに脚色した短編で、錬金術の至高の目標である、不老長寿の霊薬を手中にしたドン・ジュアン父子の「生への意志」が主題となっている。物語の最初の部分で、バルトロメオ・ベルヴィデロが自分の臨終に際し、息子のドン・ジュアンに不老長寿の霊薬の存在を明かす場面で、彼は自らを神だと言い放っている。

— Mais, reprit-il [Don Juan] à haute voix, mon père, mon cher père, il faut se soumettre à la volonté de Dieu.

— Dieu, c'est moi, répliqua le vieillard en grommelant.

— Ne blasphémez pas, s'écria le jeune homme...

(t. XI, p. 480) (下線 筆者)

ドン・ジュアンもまた霊薬を手に入れることで、神も人も信じなくなり、自己の快樂と生命を至上のものとみなすようになった。バルザックは無神論者ドン・ジュアンの誕生を次のように書いている。

Son regard profondément scrutateur pénétra dans le principe de la vie sociale, et embrassa d'autant mieux le monde qu'il le voyait à travers un tombeau. Il analysa les hommes et les choses pour en finir d'une fois avec le Passé, représenté par l'Histoire : avec le Présent, configuré par la Loi; avec l'Avenir, dévoilé par les Religions. Il prit l'âme et la matière, les jeta dans un creuset, n'y trouva rien, et dès lors il devint *DON JUAN*!

(t. XI, p. 485)

人の心を見通し、社会に君臨するドン・ジュアンの姿は、『和解したメルモス』(*Melmoth Réconcilié*)において、悪魔と契約を交わして全能の力を持つに到ったメルモスの姿と重なり合う。メルモスも人の心を読み、未来を予見し、過去をも知りうるとして、自らを神に匹敵させている。

Je[Melmoth] lis dans les cœurs, je vois l'avenir, je sais le passé. Je suis ici, et je puis être ailleurs! Je ne dépends ni du temps, ni de l'espace, ni de la distance. Le monde est mon serviteur. [...] Ma voix domine le bruit de la foudre, mes yeux luttent de clarté avec le soleil, car je suis l'égal de *Celui qui parle la lumière*.

(t. X, pp. 364-365)

神の代理者たらんとする意志は、『絶対の探究』のバルタザール・クラスにも共通している。彼が妻に自分の実験の目的を説明する件で、彼は自分が神に代わって宇宙創造の反復を行おうとしていることを明らかにする。

《Je fais les métaux, je fais les diamants, je répète la nature, s'écria-t-il.

— En seras-tu plus heureux? cria-t-elle avec désespoir. Maudite Science, maudit démon! tu oublies, Claës, que tu commets le péché d'orgueil dont fut coupable Satan. Tu entreprends sur Dieu.

— Oh! oh! Dieu!

— Il le nie! s'écria-t-elle en se tordant les mains.

(t. X, p. 720)

「私は金属を作る、ダイヤモンドを作る、自然を繰り返すのだ」というクラススの言葉に、妻は神への冒瀆を鋭く看取している。それと同時に、彼女は夫の試みの挫折をはっきりと予見する。彼女は上の言葉に続けて、神は人間には決して獲得しえない力を有していると夫を諫めている。

[...] Claës, Dieu dispose d'une puissance que tu n'auras jamais.》

A cet argument qui semblait annuler sa chère Science, il regarda sa femme en tremblant.

《Quoi! dit-il.

— La force unique, le mouvement. [...] Analyse des fleurs, des fruits, du vin de Malaga; tu découvriras certes leurs principes qui viennent, comme ceux de ton cresson, dans un milieu qui semble leur être étranger; tu peux, à la rigueur, les trouver dans la nature; mais en les rassemblant, feras-tu les incompréhensibles effets du soleil, auras-tu l'atmosphère de l'Espagne? Décomposer n'est pas créer.

(t. X, p. 720)

ここで彼女は、クラススの行っているのは分解に過ぎず、創造ではないと指摘しているが、実際、クラススは死の直前に《Eurêka!》と叫びこそすれ、「絶対」の秘密は彼の死と共に永遠に閉ざされてしまう。『不老長寿の霊薬』において、不死を求めたバルトロメオ、ドン・ジュアン親子の野望も結局最後は、虚しく失敗に終わる。まさに、『あら皮』が象徴しているように²⁶⁾、人間はすべからず、時間的存在であるという運命を免れ得ないのである。それが故に、バルザックの錬金術師たちは、なお一層、永遠を熱望し、不死を求めて止まない。ローラン・リュグジエリは次のような悲痛な叫び声を上げている。

Si vous prétendez que quelque chose nous survit, ce n'est pas nous, car tout ce qui est le moi actuel périt! Or, c'est le moi actuel que je veux continuer au-delà du terme assigné à sa vie; c'est la transformation présente à laquelle je veux procurer une plus grande durée.

(t. XI, p. 430)

第四章 「守銭奴」

人間は、不死を得られないとすれば、自己に定められた生命エネルギー量を節約するしかない。ここに、生命エネルギーの節約というバルザックにはおなじみの長寿願望が出現する。それが明確に具現化されているのが、ジャン・エステル・ヴァン・ゴブセック (Jean-Esther Van Gobseck)、シャルル・グランデ (Charles Grandet) 等に代表される守銭奴たちである。彼らは単なる吝嗇家ではなく、余分な生命運動を慎むよう厳しい節制を守る「哲学者」でもあった。例えば、ゴブセックの生活ぶりは、次のように描かれている。

Ses actions, depuis l'heure de son lever jusqu'à ses accès de toux le soir, étaient soumises à la régularité d'une pendule, C'était en quelque sorte un homme modèle que le sommeil remontait. [...] cet homme s'interrompait au milieu de son discours et se taisait au passage d'une voiture, afin de ne pas forcer sa voix. A l'imitation de Fontenelle, il économisait le mouvement vital, et concentrait tous les sentiments humains dans le moi.

(t. II, p. 965)

グランデについても、「彼は決して物音を立てなかった。すべて、動作すらも儉約しているように見えた。」(t. III, p. 1035) という件がある。

同時に彼らは、人の心を見透かし、人間の演じる悲喜劇を高みから見物するという「神の視線」に、自らを位置づけている。ゴブセックは若いデルヴィルに彼の人生哲学を説き明かしている。

[...] croyez-vous que ce ne soit rien que de pénétrer ainsi dans les plus secrets replis du cœur humain, d'épouser la vie des autres, et de la voir à nu? Des spectacles toujours variées : [...] Hier, une tragédie : [...] Demain, une comédie [...] ces bons prêtres, votre Mirabeau, Vergniaud et les autres ne sont que des bêtes auprès de mes orateurs. [...] Ces sublimes acteurs jouaient pour moi seul, et sans pouvoir me tromper. Mon regard est comme celui de Dieu, je vois dans les cœurs.

(t. II, p. 976) (下線 筆者)

このような守銭奴をバルザックは、錬金術師の範疇に属する者とみなし、彼らにその属性を与えている。例えば、ゴブセックの身体特徴の描写の中に、次のような件がある。

Il avait les lèvres minces de ces alchimistes et ces petits vieillards peints par Rembrandt ou par Metzu.

(t. II, p. 964)

グランデについて言えば、そこで毎晩金を勘定する、彼の寝室が錬金術師の実験室に譬えられている。

On n'y pénétrait en effet que par la chambre de Grandet, à qui cette pièce servait de cabinet. [...] le bonhomme voulait y rester seul comme un alchimiste à fourneau. Là, sans doute, quelque cachette avait été très habilement pratiquée, là s'emmagasinaient les titres de propriété, là pendaient les balances à peser les louis, là se faisaient nuitamment en secret les quittances, les reçues, les calculs; de manière que les gens d'affaires, voyant toujours Grandet prêt à tout, pouvaient imaginer qu'il avait à ses ordres une fée ou un démon. [...] Lui seul avait la clef de ce laboratoire.

(t. III, p. 1070) (下線 筆者)

もう一人の守銭奴、メートル・コルネリウス (Maître Cornélius) においても、彼と彼の姉についての町の噂は次のようなものであった。

[...] les observateurs les moins crédules avaient fini par attribuer à ces deux êtres bizarres la connaissance de quelque secret de vie. Ceux qui se mêlaient d'alchimie disaient que maître Cornélius savait faire de l'or.

(t. XI, p. 34)

あらゆる動作を慎み、人間的感情をも抑え、ただ他人の喜怒哀楽だけを高みから見物して生きていこうとする、これらの守銭奴たちの生き様は、バルタザール・クラススの生命の燃焼説に合致する。「生命とは、灰で覆わなければならない火²⁷⁾」であり、異常な刺激や興奮の中に身を投ずれば、たちまち命は尽きてしまう。逆に、火に油を注がなければ、長寿を全うすることができる。このクラスス (=バルザック) の理論を実践に移したのが、守銭奴であり、彼らもまた錬金術師の一翼を担っていると言えよう。

結 び

以上のように、バルザックは錬金術に対して深い理解と共感を示している。彼の描いた錬金術師像を、初期小説から順に辿ってみるならば、初めは超自然的、神秘的なベールを纏っていたのが、次第に現実的な要素を帯びるようになり、理論的にもバルザックは神秘論を斥け、合理的、科学的な説明に努めている。すなわち、『最後の妖精』、『ジャン・ルイ』、『百歳の人』等の初期小説では、登場人物は現実とは遊離した、超自然的な力を具えた *fantastique* な人物として現れるが、『絶対の探究』に到っては、現実性、社会性に深く根ざした人物として描かれている。この小説では、典型的なフランドルの生活様式が忠実に写し出され、バルタザール・クラスは崇高なる「絶対」の探究者であると同時に、その情熱の為に財産を蕩尽し、妻や子供たちを不幸に陥れた張本人でもある。「絶対」の追求に没頭するクラスと、家の名誉や家族の幸福を守ろうとする妻や娘との対立に象徴されるように、この小説においては哲学的な要素と現実的な要素の混淆が見られる。ローラン・リュグジエリに関しては、時代設定の束縛を受けて、オカルト的な色彩が濃いが、その一方、彼はカトリーヌ・ド・メディシスの寵臣として、当時の政治にどっぷり浸かっていたわけで、現実的な要素を多分に持ち合わせている。更に、ゴブセックに代表される守銭奴は、貴族階級の崩壊、新興ブルジョアジーの台頭という時代を背景に、いち早く金権力を握った勝者であった。彼らはブルジョア社会という時代性を反映した、現代の錬金術師の様相を呈しているのである。

このように、作品と共に錬金術師像は神秘的な存在から現実味のある人物へと推移していくが、彼らの基本的な思想は終始一貫している。彼らは一様に、生の秘密を追求し、時間の超越を目指す者であり、神に代わって創造行為に携わろうとし、結局は挫折する者でもある。それでもなお不死を求めて止まない彼らの絶望的な姿が、バルザックの筆によって余す所なく描かれている。そこに、『人間喜劇』の世界を創造した作者自身の自負と挫折、作者の「生への意志」を重ね合わせることも可能であろう。

註

この小論は、昭和62年度日本フランス語フランス文学会春季大会における口頭発表[『人間喜劇』における「錬金術師たち」]をもとに加筆、訂正したものである。

バルザックのテキストの引用は殆ど、*Balzac, La Comédie humaine, nouvelle édition 12 vols, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1978*による。この全集からの引用は、本文中の引用の後、巻、ページ数をつけて（例えば、t. I, p. 20）と記している。

- 1) F. S. テイラーは、アポロンの彫像を例にとって次のように説明している。
「彫像では、青銅が質料で、たとえばアポロンの像であれば、アポロンが形相である。しかし青銅そのものについていえば、土と水が質料で、『青銅の性質の原因』が形相であった。土・水は元素とされ、土と水の形相をもった究極的な第一質料だとみなされていた。」F. S. テイラー『錬金術師』 平田寛、大槻真一郎訳 人文書院、1978, p. 18.
- 2) *Ibid.*
- 3) マンリー・P・ホール『錬金術』 象徴哲学体系IV 大沼忠弘、山田耕士、吉村正和訳 人文書院、1986, p. 38.
- 4) セルジュ・ユタン『錬金術』 有田忠郎訳 白水社、1986, pp. 16-17.
- 5) マンリー・P・ホール『錬金術』 p. 38.
- 6) *Ibid.*, p. 39.
- 7) ミルチャ・エリアーデ『鍛冶師と錬金術師』 エリアーデ著作集第5巻、大室幹雄訳 せりか書房、1981, p. 18.
- 8) マイコ・モンテジュマンについての描写は次の通りである。
《[...] l'introducteur [Maïco] s'écrie d'une voix rauque : «Entre, enfant de crime!...» Vendeuil tressaillit à ces mots. Le délabrement des habits de ce gnome, sa figure sinistre, ses cheveux blancs, et son pas tremblant le firent frémir [...].》
(*Jean Louis ou la Fille trouvée*, Les Bibliophiles de l'Originale, 1961, t. III, p. 47)
- 9) *Ibid.*, p. 47.
- 10) *Ibid.*, p. 53.
- 11) *La Dernière Fée ou la Nouvelle Lampe merveilleuse*, Les Bibliophiles de l'Originale, 1963, t. I, p. 5.
- 12) 《Ce grand homme [Osterwald] [...], avait fini par trouver : ses réflexions lui apprirent qu'il existait pour l'homme social, beaucoup plus de maux que de bien. Il prétendait qu'Adam et Eve n'étaient heureux en Paradis que parce qu'ils y avaient vécu dans l'ignorance, et que cette figure de la Bible nous montrait la route du bonheur : que la civilisation donnait, il est vrai, des jouissances étonnantes; mais qu'aussi les désirs, les peines y étaient aussi cruels que les plaisirs exquis : qu'alors dans l'état de nature, on avait tous les maux de moins, plus l'ignorance des plaisirs et enfin qu'on jouissait de peu, mais que ce peu se trouvait sans mélange, semblable à l'eau des fontaines.》(*Ibid.*, t. I, pp. 45-46)
- 13) Madeleine Fargeaud, *Balzac et la Recherche de l'Absolu*, Hachette, 1968, pp. 304-309 参照。
- 14) *Ibid.*
- 15) *Ibid.*, p. 311.
- 16) *Ibid.*, p. 312.
- 17) *Lettre à Hippolyte Castille*, Club de l'Honnête Homme, 1956, *Œuvres complètes* t. 24, p. 532.
- 18) ベルゼリウスは、*Traité de Chimie* の《alchimie》の項目で次のように述べている。
《[...] La chimie proprement dite fut ainsi nommée dans l'origine : mais, dès le quatrième siècle, on commença à ne faire usage de ce mot que pour désigner la branche de la chimie qui s'occupait de la conversion d'un métal en un autre, et qui cherchait à faire de l'or. Depuis lors, *alchimie* et *art de faire de l'or* sont devenus synonymes. Quoique la chimie, au point où elle est arrivée de nos jours, ait banni à jamais les alchimistes, il ne sera pas tout à fait sans intérêt d'entrer ici dans quelques détails sur la manière dont ont été conduites les impostures relatives à la prétendue fabrication de l'or.》

(*Traité de chimie*, t. VIII, pp. 3-5) M. Fargeaud, *Balzac et la Recherche de l'Absolu*, pp. 308-309 参照。

- 19) M. Fargeaud は *Balzac et la Recherche de l'Absolu* の中 (p. 310) で, Maurice Dumas が彼の著, *Histoire générale des sciences* において, ベルゼリウスに触れた箇所を引用している。そこで Dumas は, ベルゼリウスの理論は陽電気 (électro-positif) と陰電気 (électro-négatif) の二つの極に還元する二元論であると述べている。
- 20) *La Recherche de l'Absolu*, t. X, p. 719.
- 21) 「意志論」に関しては, 拙論「バルザックの『意志論』」京都大学フランス語学フランス文学研究室発行『仏文研究X III』1984, pp. 180-208 参照されたい。
- 22) ローラン・リュグジエリが王に釈明する場面で, 「運動 (Mouvement)」に触れて次のように述べている。

《Le monde matériel est composé d'éléments, ces éléments ont eux-mêmes des principes. Ces principes se résolvent en un seul qui est doué de mouvement. Le nombre TROIS est la formule de la création : la Matière, le Mouvement, le Produit.》

(t. XI, p. 431).

この「運動」に対する考えは, クラースが実験の結果引き出したものと同様であり, また『あら皮』に登場する物理学者ブランシェットも「運動」に言及している。

《Un mouvement, quelqu'il soit, est un immense pouvoir et l'homme n'invente pas de pouvoirs. Le pouvoir est un, comme le mouvement, l'essence même de pouvoir. Tout est mouvement. La pensée est un mouvement. La nature est établie sur le mouvement.》

(t. X, p. 244).

- 23) *Le Centenaire ou les deux Beringheld*, Les Bibliophiles de l'Originale, 1961, t. IV, pp. 76-77.
- 24) 例えば, ルイ・ランベールは次のように語っている。
- 《L'Unité a été le point de départ de tout ce qui fut produit; il en est résulte des Composés, mais la fin doit être identique au commencement.》

(t. XI, p. 691).

- 25) *Le Centenaire ou les deux Beringheld*, t. IV, pp. 23-24.
- 26) 『あら皮』の主人公ラファエルが手中にした「あら皮」は, 人間の生命の表徴で, 所有者の欲望を叶える度に縮んでいき, それと同時に所有者の命も縮むというものであった。事実, ラファエルも最後に小さく萎びたあら皮を手で死んでしまう。
- 27) *Les Martyrs ignorés*, t. XII, p. 744.

参考文献

- セルジュ・ユタン 『錬金術』 有田忠郎訳 白水社, 1986.
- F. S テイラー 『錬金術師』 平田寛, 大槻真一郎訳 人文書院, 1978.
- マンリー・P・ホール 『錬金術』 大沼忠弘, 山田耕士, 吉村正和訳 人文書院, 1986.
- ミルチャ・エリアーデ 『鍛冶師と錬金術師』 エリアーデ著作集第5巻, 大室幹雄訳 せりか書房, 1981.
- C. G. ユング 『心理学と錬金術』 2巻 池田紘一, 鎌田道生訳 人文書院, 1978.
- 吉田光邦 『錬金術』 中央新書9, 中央公論社, 1985.
- Pierre Barbéris, *Aux Sources de Balzac*, Slatkine Reprints, 1985.

Madeleine Fargeaud, *Balzac et la Recherche de l'Absolu*, Hachette, 1968.

Maric-Claude Amblard, *L'Œuvre fantastique de Balzac*, Didier, 1972.

Bernard Guyon, 《*Le Don Juan de Balzac*》, in *L'Année balzacienne 1977*, Garnier.

道宗照夫 『バルザック初期小説研究「序説」』 風間書房, 1982.